

第 3 章

ルート系

この章において、特に断らない限り体 \mathbb{K} は代数閉体^{*1}で、かつ $\text{char } \mathbb{K} = 0$ であるとする。また、Lie 代数 \mathfrak{g} は常に有限次元であるとする。

3.1 公理的方法

Euclid 空間 (Euclid space) とは、

- 体 \mathbb{R} 上の有限次元ベクトル空間 \mathbb{E}
- 対称かつ正定値な双線型形式 $(\cdot, \cdot)_{\mathbb{E}}: \mathbb{E} \times \mathbb{E} \rightarrow \mathbb{R}$

の組 $(\mathbb{E}, (\cdot, \cdot)_{\mathbb{E}})$ のことを言う^{*2}。Euclid 空間 $(\mathbb{E}, (\cdot, \cdot)_{\mathbb{E}})$ の任意の元 $\alpha \in \mathbb{E}$ に対して、

- 鏡映面 (reflecting hyperplane)^{*3}

$$P_{\alpha} := \{ \beta \in \mathbb{E} \mid (\beta, \alpha)_{\mathbb{E}} = 0 \} = (\mathbb{R}\alpha)^{\perp}$$

- 鏡映面 P_{α} に関する鏡映 (reflecting)

$$\sigma_{\alpha}: \mathbb{E} \rightarrow \mathbb{E}, \beta \mapsto \beta - 2 \frac{(\beta, \alpha)_{\mathbb{E}}}{(\alpha, \alpha)_{\mathbb{E}}} \alpha$$

を考える。

$2 \frac{(\beta, \alpha)_{\mathbb{E}}}{(\alpha, \alpha)_{\mathbb{E}}} \in \mathbb{R}$ が頻繁に登場するので、

$$[[\beta, \alpha]] := 2 \frac{(\beta, \alpha)_{\mathbb{E}}}{(\alpha, \alpha)_{\mathbb{E}}}$$

と略記することにする。写像 $[[\cdot, \cdot]]: \mathbb{E} \times \mathbb{E} \rightarrow \mathbb{R}$ は記号的には内積のように見えるかもしれないが、あくまで第一引数についてのみ線型なのであって、対称でも双線型でもないことに注意。

^{*1} つまり、定数でない任意の 1 変数多項式 $f(x) \in \mathbb{K}[x]$ に対してある $\alpha \in \mathbb{K}$ が存在して $f(\alpha) = 0$ を満たす。

^{*2} Euclid 空間と言って位相空間のことを指す場合があるが、そのときは双線型形式 $(\cdot, \cdot)_{\mathbb{E}}$ を使って \mathbb{E} 上の距離関数を $d_{\mathbb{E}}: \mathbb{E} \times \mathbb{E} \rightarrow \mathbb{R}_{\geq 0}$, $(x, y) \mapsto (x - y, x - y)_{\mathbb{E}}$ と定義し (これは通常 **Euclid 距離**と呼ばれる), \mathbb{E} に $d_{\mathbb{E}}$ による距離位相を入れる。

^{*3} 余次元 1 の部分 \mathbb{R} -ベクトル空間。最右辺は対称かつ非退化な双線型形式 $(\cdot, \cdot)_{\mathbb{E}}$ による直交補空間の意味である。

σ_α は \mathbb{R} -線型でかつ $\forall \beta \in \mathbb{E}$ に対して

$$\begin{aligned}\sigma_\alpha \circ \sigma_\alpha(\beta) &= (\beta - \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \alpha) - \llbracket (\beta - \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \alpha), \alpha \rrbracket \alpha \\ &= \beta - \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \alpha - \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \alpha + \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \llbracket \alpha, \alpha \rrbracket \alpha \\ &= \beta - 2\llbracket \beta, \alpha \rrbracket \alpha + 2\llbracket \beta, \alpha \rrbracket \alpha \\ &= \beta\end{aligned}$$

を充たす, i.e. $\sigma_\alpha^{-1} = \sigma_\alpha$ なので, $\sigma_\alpha \in \text{GL}(\mathbb{E})$ である.

補題 3.1.1: 鏡映の特徴付け

Euclid 空間 \mathbb{E} と,

- $\mathbb{E} = \text{Span}_{\mathbb{R}} \Phi$
- $\forall \alpha \in \Phi, \sigma_\alpha(\Phi) = \Phi$

を充たす \mathbb{E} の有限部分集合 $\Phi \subset \mathbb{E}$ を与える.

このとき, $\sigma \in \text{GL}(\mathbb{E})$ が

(RF-1) $\sigma(\Phi) = \Phi$

(RF-2) 余次元 1 の部分ベクトル空間 $P \subset \mathbb{E}$ が存在して, $\forall \beta \in P, \sigma(\beta) = \beta$ が成り立つ

(RF-3) $\exists \alpha \in \Phi \setminus \{0\}, \sigma(\alpha) = -\alpha$

の 3 条件を満たすならば $\sigma = \sigma_\alpha$ (かつ $P = P_\alpha$) である.

証明 $\tau := \sigma \circ \sigma_\alpha (= \sigma \circ \sigma_\alpha^{-1})$ とおき, $\tau = \text{id}_{\mathbb{E}}$ であることを示す.

(RF-1) より $\tau(\Phi) = \Phi$, $\tau(\alpha) = \alpha$ が成り立つので $\tau|_{\mathbb{R}\alpha} = \text{id}_{\mathbb{R}\alpha}$ である. さらに \mathbb{R} -線型写像

$$\bar{\tau}: \mathbb{E}/\mathbb{R}\alpha \longrightarrow \mathbb{E}/\mathbb{R}\alpha, \beta + \mathbb{R}\alpha \longmapsto \tau(\beta) + \mathbb{R}\alpha$$

は well-defined だが, **(RF-2)** より $\bar{\tau} = \text{id}_{\mathbb{E}/\mathbb{R}\alpha}$ である. よって τ の固有値は全て 1 であり, τ の最小多項式 $f(t)$ は $(t-1)^{\dim \mathbb{E}}$ の約元である. 一方, Φ は有限集合なので, $\forall \beta \in \Phi$ に対してある $k_\beta \in \mathbb{N}$ が存在して $\tau^{k_\beta}(\beta) = \beta$ を充たす. ここで $k := \max\{k_\beta \mid \beta \in \Phi\}$ とおくと, **(RF-1)** より $\tau^k = \text{id}_{\mathbb{E}}$ が言える. よって $f(t)$ は $t^k - 1$ の約元でもある. 従って, $f(t) = \gcd((t-1)^{\dim \mathbb{E}}, t^k - 1) = t - 1$ だと分かった. 故に $\tau = \text{id}_{\mathbb{E}}$ である. ■

3.1.1 ルート系

前章で与えたルート系の公理を再掲するところから始めよう:

公理 3.1.1: ルート系

- 有限次元 Euclid 空間 $(\mathbb{E}, (\cdot, \cdot)_{\mathbb{E}})$
- \mathbb{E} の部分集合 $\Phi \subset \mathbb{E}$

の組 (\mathbb{E}, Φ) が **ルート系** (root system) であるとは, 以下の条件を充たすことを言う:

(Root-1) Φ は 0 を含まない有限集合で, かつ $\mathbb{E} = \text{Span}_{\mathbb{R}} \Phi$ を満たす.

(Root-2) $\lambda\alpha \in \Phi \implies \lambda = \pm 1$

(Root-3) $\alpha, \beta \in \Phi \implies \sigma_{\alpha}(\beta) \in \Phi$

(Root-4) $\alpha, \beta \in \Phi \implies \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \in \mathbb{Z}$

Φ の元のことをルート (root) と呼ぶ.

! 本資料の以降では, 文脈上直積集合の要素との混同が起きる恐れがないときは **Euclid 空間** $(\mathbb{E}, (\cdot, \cdot)_{\mathbb{E}})$ に備わっている双線型形式を $(\cdot, \cdot)_{\mathbb{E}}$ と書く代わりに (\cdot, \cdot) と略記する.

ルート系と言ったときに, **(Root-2)** を除外する場合がある. その場合我々が採用した定義に該当するものは簡約ルート系 (reduced root system) と呼ばれる.

定義 3.1.1:

ルート系 (\mathbb{E}, Φ) の **ランク** (rank) とは, $\dim \mathbb{E} \in \mathbb{N}$ のことを言う.

公理 **(Root-4)** は, 任意のルートの 2 つ組の配位に非常に強い制約を与える. というのも, 2 つのベクトルのなす角の定義を思い出すと, $\forall \alpha, \beta \in \Phi$ に対してある $\theta \in [0, \pi]$ が存在して

$$\llbracket \beta, \alpha \rrbracket = 2 \frac{\|\beta\|}{\|\alpha\|} \cos \theta \in \mathbb{Z} \quad (3.1.1)$$

$$\llbracket \alpha, \beta \rrbracket \llbracket \beta, \alpha \rrbracket = 4 \cos^2 \theta \in \mathbb{Z} \quad (3.1.2)$$

が成り立たねばならないのである. $\llbracket \alpha, \beta \rrbracket, \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \in \mathbb{Z}$ かつ $0 \leq \cos^2 \theta \leq 1$ なので, (3.1.2) から

$$\cos^2 \theta = 0, \frac{(\pm 1) \cdot (\pm 1)}{4}, \frac{(\pm 1) \cdot (\pm 2)}{4}, \frac{(\pm 1) \cdot (\pm 3)}{4}, \frac{(\pm 1) \cdot (\pm 4)}{4}, \frac{(\pm 2) \cdot (\pm 2)}{4} \quad (\text{複号同順})$$

しかあり得ないとわかる. **(Root-2)** も考慮すると, $\|\alpha\| \leq \|\beta\|$ ならば*4 あり得る可能性は以下の通り*5:

表 3.1: 可能なルートの 2 つ組 α, β

$\llbracket \alpha, \beta \rrbracket$	$\llbracket \beta, \alpha \rrbracket$	θ	$\ \beta\ ^2 / \ \alpha\ ^2$
0	0	$\frac{\pi}{2}$	-
1	1	$\frac{\pi}{3}$	1
-1	-1	$\frac{2\pi}{3}$	1
1	2	$\frac{\pi}{4}$	2
-1	-2	$\frac{3\pi}{4}$	2
1	3	$\frac{\pi}{6}$	3
-1	-3	$\frac{5\pi}{6}$	3
2	2	0	1
-2	-2	π	1

*4 このとき (3.1.1) より $\llbracket \alpha, \beta \rrbracket \leq \llbracket \beta, \alpha \rrbracket$

*5 表 3.1 の最後の 2 段は $\beta = \pm \alpha$ の場合に相当する.

補題 3.1.2:

(\mathbb{E}, Φ) をルート系とする. $\alpha \neq \pm\beta$ を満たす任意の $\alpha, \beta \in \Phi$ に対して以下が成り立つ:

- (1) $(\alpha, \beta) > 0 \implies \alpha - \beta \in \Phi$
- (2) $(\alpha, \beta) < 0 \implies \alpha + \beta \in \Phi$

証明 $(\alpha, \beta) > 0$ とする. このとき $[\alpha, \beta] > 0$ であるから, 表 3.1 より $[\alpha, \beta], [\beta, \alpha]$ の少なくとも一方は 1 に等しい. $[\alpha, \beta] = 1$ だとすると, (Root-3) から $\sigma_\beta(\alpha) = \alpha - \beta \in \Phi$ がいえる. $[\beta, \alpha] = 1$ ならば $\sigma_\alpha(\beta) = \beta - \alpha \in \Phi$ であり, $\sigma_{\beta-\alpha}(\beta - \alpha) = \alpha - \beta \in \Phi$ が従う. (2) は (1) において β の代わりに $-\beta = \sigma_\beta(\beta) \in \Phi$ を用いて同じ議論をすれば良い. ■

定義 3.1.2: α -string through β

(\mathbb{E}, Φ) をルート系とする. $\alpha \neq \pm\beta$ を満たす任意の $\alpha, \beta \in \Phi$ に対して, Φ の部分集合

$$\{\beta + \lambda\alpha \in \mathbb{E} \mid \lambda \in \mathbb{Z}\} \cap \Phi$$

のことを α -string through β と呼ぶ.

命題 3.1.1: α -string through β の性質

(\mathbb{E}, Φ) をルート系とする. $\alpha \neq \pm\beta$ を満たす任意の $\alpha, \beta \in \Phi$ に対して

$$\begin{aligned} r &:= \max\{\lambda \in \mathbb{Z}_{\geq 0} \mid \beta - \lambda\alpha \in \Phi\}, \\ q &:= \max\{\lambda \in \mathbb{Z}_{\geq 0} \mid \beta + \lambda\alpha \in \Phi\} \end{aligned}$$

とおく. このとき以下が成り立つ:

- (1) α -string through β は \mathbb{E} の部分集合

$$\{\beta + \lambda\alpha \in \mathbb{E} \mid -r \leq \lambda \leq q\} \tag{3.1.3}$$

に等しい. i.e. $-r \leq \lambda \leq q$ に対して $\beta + \lambda\alpha \in \Phi$ である.

- (2) α -string through β は鏡映 σ_α の作用の下で不変である.
- (3) $r - q = [\beta, \alpha]$. 特に α -string through β の長さは 4 以下である.

証明 (1) 背理法により示す. ある $-r < \lambda < q$ に対して $\beta + \lambda\alpha \notin \Phi$ であるとする. このときある $-r \leq s < p \leq q$ が存在して $\beta + s\alpha \in \Phi$, $\beta + (s-1)\alpha \notin \Phi$, $\beta + (p-1)\alpha \notin \Phi$, $\beta + p\alpha \in \Phi$ を満たすが, 補題 3.1.2 の対偶よりこのとき $(\alpha, \beta + s\alpha) \leq 0 \leq (\alpha, \beta + p\alpha)$ が成り立つ. よって $(p-s)(\alpha, \alpha) \geq 0$ である. 然るに $p < s$ かつ $(\alpha, \alpha) > 0$ なのでこれは矛盾である.

- (2) $-r \leq \lambda \leq q$ に対して

$$\begin{aligned} \sigma_\alpha(\beta + \lambda\alpha) &= \beta + \lambda\alpha - [\beta, \alpha]\alpha - \lambda[\alpha, \alpha]\alpha \\ &= \beta - ([\beta, \alpha] + \lambda)\alpha \end{aligned}$$

が成り立つ. (Root-3) より最右辺は Φ の元であり, かつ (Root-4) より $[\beta, \alpha] + \lambda \in \mathbb{Z}$ なので, (1)

より $-r \leq \llbracket \beta, \alpha \rrbracket + \lambda \leq q$ だと分かった.

(3) r, q の定義より, (2) の証明において

$$\sigma_\alpha(\beta + q\alpha) = \beta - (\llbracket \beta, \alpha \rrbracket + q)\alpha = \beta - r\alpha$$

が成り立たねばならない. よって

$$r - q = \llbracket \beta, \alpha \rrbracket$$

である. 表 3.1 より $|r - q| \leq 3$ であるから, 集合 (3.1.3) の要素数は 4 以下である. ■

3.1.2 Weyl 群

定義 3.1.3: Weyl 群

(\mathbb{E}, Φ) をルート系とする. $\text{GL}(\mathbb{E})$ の部分集合 $\{\sigma_\alpha \in \text{GL}(\mathbb{E}) \mid \alpha \in \Phi\}$ が生成する $\text{GL}(\mathbb{E})$ の部分群のことをルート系 (\mathbb{E}, Φ) の **Weyl 群** (Weyl group) と呼び, $\mathscr{W}_{\mathbb{E}}(\Phi)$ と書く.

本資料の以降では, 文脈上考えているルート系が明らかな場合 $\mathscr{W}_{\mathbb{E}}(\Phi)$ を \mathscr{W} と略記する.

(Root3) より, $\forall \tau \in \mathscr{W}_{\mathbb{E}}(\Phi)$ の Φ への制限は全単射である. その上 (Root-1) から Φ は有限集合でかつ $\mathbb{E} = \text{Span}_{\mathbb{R}} \Phi$ が成り立つので, $\mathscr{W}_{\mathbb{E}}(\Phi)$ を Φ に作用する対称群 $\mathfrak{S}_{|\Phi|}$ の部分群と同一視できる. 特に $\mathscr{W}_{\mathbb{E}}(\Phi)$ は有限群である.

補題 3.1.3:

(\mathbb{E}, Φ) をルート系とする. $\tau \in \text{GL}(\mathbb{E})$ が $\tau(\Phi) = \Phi$ を充たすならば, $\forall \alpha, \beta \in \Phi$ に対して以下が成り立つ:

- (1) $\tau \circ \sigma_\alpha \circ \tau^{-1} = \sigma_{\tau(\alpha)}$
- (2) $\llbracket \beta, \alpha \rrbracket = \llbracket \tau(\beta), \tau(\alpha) \rrbracket$

証明 $\forall \alpha, \beta \in \Phi$ をとる. (Root-3) より $\sigma_\alpha(\beta) \in \Phi$ なので, $\tau \circ \sigma_\alpha \circ \tau^{-1}(\tau(\beta)) = \sigma_\alpha(\beta) \in \Phi$ が成り立つ. 一方で

$$\tau \circ \sigma_\alpha \circ \tau^{-1}(\tau(\beta)) = \tau(\beta - \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \alpha) = \tau(\beta) - \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \tau(\alpha) \quad (3.1.4)$$

である. $\beta \in \Phi$ は任意で $\tau \in \text{GL}(\mathbb{E})$ は全単射なので

$$\text{(RF-1)} \quad \tau \circ \sigma_\alpha \circ \tau^{-1}(\Phi) = \Phi$$

$$\text{(RF-2)} \quad \forall \beta \in P_\alpha, \tau \circ \sigma_\alpha \circ \tau^{-1}(\beta) = \beta$$

$$\text{(RF-3)} \quad \tau(\alpha) \in \Phi \setminus \{0\}, \tau \circ \sigma_\alpha \circ \tau^{-1}(\tau(\alpha)) = -\tau(\alpha)$$

が成り立つことが分かった. よって補題 3.1.1 より $\tau \circ \sigma_\alpha \circ \tau^{-1} = \sigma_{\tau(\alpha)}$ である.

さらに (3.1.4) から

$$\tau(\beta) - \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \tau(\alpha) = \sigma_{\tau(\alpha)}(\tau(\beta)) = \tau(\beta) - \llbracket \tau(\beta), \tau(\alpha) \rrbracket \tau(\alpha)$$

が分かるので (2) が従う. ■

定義 3.1.4: ルート系の同型

2つのルート系 (\mathbb{E}, Φ) , (\mathbb{E}', Φ') を与える. 写像

$$\phi: \mathbb{E} \longrightarrow \mathbb{E}'$$

がルート系の同型写像 (isomorphism) であるとは, 以下の3条件を満たすことを言う:

- (1) ϕ は \mathbb{R} -ベクトル空間の同型写像
- (2) $\phi(\Phi) = \Phi'$
- (3) $\forall \alpha, \beta \in \Phi$ に対して $[\phi(\beta), \phi(\alpha)] = [\beta, \alpha]$

ルート系 (\mathbb{E}, Φ) の自己同型 (automorphism) とは, $\phi \in \text{GL}(\mathbb{E})$ であって $\phi(\Phi) = \Phi$ を満たすものを言う. これは補題 3.1.3-(2) により自動的にルート系の同型となる. ルート系の自己同型全体が写像の合成に関してなす群のことをルート系の自己同型群と呼び, $\text{Aut } \Phi$ と書く.

ルート系の同型

$$\phi: (\mathbb{E}, \Phi) \longrightarrow (\mathbb{E}', \Phi')$$

について, $\forall \alpha, \beta \in \Phi$ に対して

$$\sigma_{\phi(\alpha)} \circ \phi(\beta) = \phi(\beta) - [\phi(\beta), \phi(\alpha)]\phi(\alpha) = \phi(\beta - [\beta, \alpha]\alpha) = \phi \circ \sigma_{\alpha}(\beta)$$

が成り立つ. i.e. ルート系の図式

$$\begin{array}{ccc} \Phi & \xrightarrow{\phi} & \Phi' \\ \sigma_{\alpha} \downarrow & & \downarrow \sigma_{\phi(\alpha)} \\ \Phi & \xrightarrow{\phi} & \Phi' \end{array}$$

は可換である. よってルート系の同型は Weyl 群の自然な (群の) 同型

$$\begin{aligned} \bar{\phi}: \mathcal{W}_{\mathbb{E}}(\Phi) &\longrightarrow \mathcal{W}_{\mathbb{E}'}(\Phi'), \\ \sigma &\longmapsto \phi \circ \sigma \circ \phi^{-1} \end{aligned}$$

を引き起こす.

補題 3.1.4:

ルート系 (\mathbb{E}, Φ) の Weyl 群 $\mathcal{W}_{\mathbb{E}}(\Phi)$ は, ルート系の自己同型群 $\text{Aut } \Phi$ の正規部分群である.

証明 $\forall \sigma \in \mathcal{W}_{\mathbb{E}}(\Phi)$ を1つとる. このときある $\alpha_1, \dots, \alpha_k \in \Phi$ が存在して $\sigma = \sigma_{\alpha_1} \circ \dots \circ \sigma_{\alpha_k}$ と書ける^{*6}. 従って $\forall \tau \in \text{Aut } \Phi$ に対して, 補題 3.1.3-(1) より

$$\tau \circ \sigma \circ \tau^{-1} = (\tau \circ \sigma_{\alpha_1} \circ \tau^{-1}) \circ \dots \circ (\tau \circ \sigma_{\alpha_k} \circ \tau^{-1}) = \sigma_{\tau(\alpha_1)} \circ \dots \circ \sigma_{\tau(\alpha_k)} \in \mathcal{W}_{\mathbb{E}}(\Phi)$$

^{*6} $\sigma_{\alpha_i}^{-1} = \sigma_{\alpha_i}$ なのでこれで良い.

が成り立つ. i.e. $\mathcal{W}_{\mathbb{E}}(\Phi) \triangleleft \text{Aut } \Phi$ である. ■

定義 3.1.5: 双対ルート系

ルート系 (\mathbb{E}, Φ) に対して

$$\Phi^{\vee} := \left\{ \frac{2}{(\alpha, \alpha)} \alpha \in \mathbb{E} \mid \alpha \in \Phi \right\}$$

とおき, 組 $(\mathbb{E}, \Phi^{\vee})$ のことを (\mathbb{E}, Φ) の双対ルート系 (dual root system) と呼ぶ.

$\alpha \in \Phi$ に対して

$$\alpha^{\vee} := \frac{2}{(\alpha, \alpha)} \alpha \in \Phi^{\vee}$$

と書く.

双対ルート系がルート系の公理を充たすことを確認しよう:

(Root-1,2) (\mathbb{E}, Φ) がルート系なので明らか.

(Root-3) $\forall \alpha^{\vee}, \beta^{\vee} \in \Phi^{\vee}$ をとる. このとき

$$\begin{aligned} \sigma_{\alpha^{\vee}}(\beta^{\vee}) &= \frac{2}{(\beta, \beta)} \beta - \left[\frac{2}{(\beta, \beta)} \beta, \frac{2}{(\alpha, \alpha)} \alpha \right] \frac{2}{(\alpha, \alpha)} \alpha \\ &= \frac{2}{(\beta, \beta)} \beta - \frac{\frac{2}{(\beta, \beta)}}{\frac{2}{(\alpha, \alpha)}} [\beta, \alpha] \frac{2}{(\alpha, \alpha)} \alpha \\ &= \frac{2}{(\beta, \beta)} \sigma_{\alpha}(\beta) \end{aligned} \tag{3.1.5}$$

だが,

$$\begin{aligned} (\sigma_{\alpha}(\beta), \sigma_{\alpha}(\beta)) &= (\beta, \beta) - 2\beta, \alpha + [\beta, \alpha]^2(\alpha, \alpha) \\ &= (\beta, \beta) - 2\beta, \alpha + 2\beta, \alpha \\ &= (\beta, \beta) \end{aligned}$$

なので

$$\sigma_{\alpha^{\vee}}(\beta^{\vee}) = \sigma_{\alpha}(\beta)^{\vee} \in \Phi^{\vee}$$

だと分かった.

(Root-4) $\forall \frac{2}{(\alpha, \alpha)}\alpha, \frac{2}{(\beta, \beta)}\beta \in \Phi^\vee$ をとる. このとき

$$\begin{aligned} \llbracket \beta^\vee, \alpha^\vee \rrbracket &= \left\llbracket \frac{2}{(\beta, \beta)}\beta, \frac{2}{(\alpha, \alpha)}\alpha \right\llbracket \\ &= \frac{\frac{2}{(\beta, \beta)}}{\frac{2}{(\alpha, \alpha)}} \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \\ &= \frac{\frac{2(\alpha, \beta)}{(\beta, \beta)}}{\frac{2(\beta, \alpha)}{(\alpha, \alpha)}} \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \\ &= \frac{\llbracket \alpha, \beta \rrbracket}{\llbracket \beta, \alpha \rrbracket} \llbracket \beta, \alpha \rrbracket \\ &= \llbracket \alpha, \beta \rrbracket \in \mathbb{Z} \end{aligned}$$

が言えた.

補題 3.1.5:

$$\mathcal{W}_{\mathbb{E}}(\Phi) \cong \mathcal{W}_{\mathbb{E}}(\Phi^\vee)$$

証明 (3.1.5) より, 写像 $\sigma_\alpha \mapsto \sigma_{\alpha^\vee}$ は同型写像である. ■

3.2 単純ルートと Weyl 群

この節では (\mathbb{E}, Φ) を任意の **ランク l のルート系** とし, その **Weyl 群** を \mathcal{W} と略記する.

3.2.1 ルート系の底と Weyl の区画

定義 3.2.1: ルート系の底

Φ の部分集合 $\Delta \subset \Phi$ が底 (base) であるとは, 以下を充たすことをいう:

(B-1) Δ は \mathbb{R} -ベクトル空間 \mathbb{E} の基底である.

(B-2) $\forall \beta \in \Phi$ に対して 整数 の族 $\{\beta_\alpha\}_{\alpha \in \Delta} \in \prod_{\alpha \in \Delta} \mathbb{Z}$ が一意的に存在して

$$\beta = \sum_{\alpha \in \Delta} \beta_\alpha \alpha$$

を充たし, $\forall \alpha \in \Delta, \beta_\alpha \geq 0$ であるか $\forall \alpha \in \Delta, \beta_\alpha \leq 0$ であるかのどちらかである.

- Δ の元のことを **単純ルート** (simple root) と呼ぶ.
- $\beta = \sum_{\alpha \in \Delta} \beta_\alpha \alpha \in \Phi$ に対して

$$\text{ht } \beta := \sum_{\alpha \in \Delta} \beta_\alpha \in \mathbb{Z}$$

と定義し、底 Δ に関するルート β の高さ (height) と呼ぶ。

- $\beta = \sum_{\alpha \in \Delta} \beta_\alpha \alpha \in \Phi$ が**正** (resp. **負**) であるとは、 $\forall \alpha \in \Delta, \beta_\alpha \geq 0$ (resp. $\forall \alpha \in \Delta, \beta_\alpha \leq 0$) が成り立つことを言い、 $\beta \succ 0$ (resp. $\beta \prec 0$) と書く^a。
- 正 (resp. 負) のルート全体の集合のことを Φ^+ (resp. Φ^-) と書く^b。
- \mathbb{E} 上の半順序 $\prec \subset \mathbb{E} \times \mathbb{E}$ を

$$\mu \prec \lambda \stackrel{\text{def}}{\iff} \exists! \{k_\alpha\}_{\alpha \in \Delta} \in \prod_{\alpha \in \Delta} \mathbb{R}_{\geq 0}, \lambda - \mu = \sum_{\alpha \in \Delta} k_\alpha \alpha$$

と定義する。

^a L^AT_EX コマンドは \succ が `\succ`, \prec が `\prec` である。

^b 明らかに $\Phi^- = -\Phi^+$ である。

\prec が半順序になっていることを確認しておこう：

(反射律) $\forall \mu \in \mathbb{E}$ に対して $\mu - \mu = 0$ が成り立つので $\mu \prec \mu$ である。

(反対称律) $\mu \prec \lambda$ かつ $\lambda \prec \mu$ だとする。このとき $\{k_\alpha\}_{\alpha \in \Delta}, \{l_\alpha\}_{\alpha \in \Delta} \in \prod_{\alpha \in \Delta} \mathbb{R}_{\geq 0}$ が一意的に存在して

$$\lambda - \mu = \sum_{\alpha \in \Delta} k_\alpha \alpha, \quad \mu - \lambda = \sum_{\alpha \in \Delta} l_\alpha \alpha$$

と書ける。辺々足すと (B-1) より $\forall \alpha \in \Delta$ に対して $k_\alpha + l_\alpha = 0$ だと分かるが、 $k_\alpha \geq 0$ かつ $l_\alpha \geq 0$ なので $k_\alpha = l_\alpha = 0$, i.e. $\mu - \lambda = 0 \iff \mu = \lambda$ が言えた。

(推移律) $\mu \prec \lambda$ かつ $\lambda \prec \nu$ だとする。このとき $\nu - \mu = (\nu - \lambda) + (\lambda - \mu)$ なので明らかに $\mu \prec \nu$ である。

ルート系 (\mathbb{E}, Φ) の底を定義したのは良いが、存在しなくては意味がない。

補題 3.2.1:

Δ が Φ の底ならば、相異なる任意の 2 つの単純ルート $\alpha, \beta \in \Delta$ に対して $(\alpha, \beta) \leq 0$ であり、 $\alpha - \beta \notin \Delta$ である。

証明 背理法により示す。 $(\alpha, \beta) > 0$ だとする。仮定より $\alpha \neq \beta$ であり、かつ Δ の元の線型独立性から $\beta \neq -\alpha$ なので、補題 3.1.2 から $\alpha - \beta \in \Delta$ と言うことになる。然るにこのとき $\alpha - \beta \in \Phi$ が $\alpha, \beta \in \Delta$ の係数 1, -1 の線型結合で書けていることになり (B-2) に矛盾する。 ■

定義 3.2.2:

$\forall \gamma \in \mathbb{E}$ に対して以下を定義する:

- Φ の部分集合

$$\Phi^+(\gamma) := \{ \alpha \in \Phi \mid (\gamma, \alpha) > 0 \}$$

-

$$\gamma \in \mathbb{E} \setminus \bigcup_{\alpha \in \Phi} P_\alpha$$

のとき, γ は**正則** (regular) であるという. γ が正則でないとき**特異** (singular) であるという.

- $\alpha \in \Phi^+(\gamma)$ が

$$\exists \beta_1, \beta_2 \in \Phi^+(\gamma), \alpha = \beta_1 + \beta_2$$

を満たすとき, α は**分割可能** (decomposable) であるという. 分割可能でないとき**分割不可能** (indecomposable) であるという.

γ が正則ならば $\forall \alpha \in \Phi$ に対して $(\gamma, \alpha) \neq 0$ なので, $\Phi = \Phi^+(\gamma) \amalg (-\Phi^+(\gamma))$ (disjoint union) が成り立つ.

定理 3.2.1: 底の存在

正則な任意の $\gamma \in \mathbb{E}$ を与える. このとき集合

$$\Delta(\gamma) := \{ \alpha \in \Phi^+(\gamma) \mid \text{分割不可能} \}$$

は Φ の**底**である. 逆に Φ の任意の底 Δ に対してある正則な $\gamma \in \mathbb{E}$ が存在して $\Delta = \Delta(\gamma)$ となる.

証明 step1: $\Phi^+(\gamma)$ の任意の元は $\Delta(\gamma)$ の $\mathbb{Z}_{\geq 0}$ -係数線型結合で書ける

背理法により示す. $\Delta(\gamma)$ の $\mathbb{Z}_{\geq 0}$ -係数線型結合で書けない $\alpha \in \Phi^+(\gamma)$ が存在するとする. このとき, そのような α のうち (γ, α) が最小であるようなものが存在するのでそれを α_0 とおく. $\alpha_0 \notin \Delta(\gamma)$ なので^{*7} α_0 は分割可能であり, ある $\beta_1, \beta_2 \in \Phi^+(\gamma)$ が存在して $\alpha = \beta_1 + \beta_2$ と書ける. このとき

$$(\gamma, \alpha_0) = (\gamma, \beta_1) + (\gamma, \beta_2) > (\gamma, \beta_i)$$

が成り立つので, α_0 の最小性から β_1, β_2 はどちらも $\Delta(\gamma)$ の元の $\mathbb{Z}_{\geq 0}$ -係数線型結合で書ける. 然るにこのとき α も $\Delta(\gamma)$ の元の $\mathbb{Z}_{\geq 0}$ -係数線型結合で書けることになって矛盾.

step2: $\alpha, \beta \in \Delta(\gamma)$ かつ $\alpha \neq \beta$ ならば, $(\alpha, \beta) \leq 0$

背理法により示す. $(\alpha, \beta) > 0$ を仮定する. このとき補題 3.1.2-(1) より $\alpha - \beta \in \Phi$ であり, $\beta - \alpha = \sigma_{\alpha-\beta}(\alpha - \beta) \in \Phi$ もわかる. よって $\alpha - \beta \in \Phi^+(\gamma)$ または $\beta - \alpha \in \Phi^+(\gamma)$ である. 然るに前者の場合 $\alpha = \beta + (\alpha - \beta)$ なので $\alpha \in \Delta(\gamma)$ が分割可能ということになって矛盾し, 後者の場合は $\beta = \alpha + (\beta - \alpha)$ なので $\beta \in \Delta(\gamma)$ が分割可能ということになって矛盾である.

^{*7} $\alpha_0 \in \Delta(\gamma)$ だとすると, $\alpha_0 \in \Delta(\gamma)$ の係数 $1 \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$ の線型結合として書けていることになり矛盾.

step3: $\Delta(\gamma)$ の元は互いに線型独立

$\{k_\alpha\}_{\alpha \in \Delta(\gamma)} \in \prod_{\alpha \in \Delta} \mathbb{R}$ に対して $\sum_{\alpha \in \Delta(\gamma)} k_\alpha \alpha = 0$ を仮定する. $\forall \alpha \in \Delta(\gamma)$ に対して

$$s_\alpha := \begin{cases} k_\alpha, & k_\alpha > 0 \\ 0, & k_\alpha \leq 0 \end{cases} \quad t_\alpha := \begin{cases} -k_\alpha, & k_\alpha < 0 \\ 0, & k_\alpha \geq 0 \end{cases}$$

とおくと, 仮定より

$$\sum_{\alpha \in \Delta(\gamma)} s_\alpha \alpha = \sum_{\alpha \in \Delta(\gamma)} t_\alpha \alpha$$

が成り立つ. $\varepsilon := \sum_{\alpha \in \Delta} s_\alpha \alpha$ とおくと, **step2** から

$$0 \leq (\varepsilon, \varepsilon) = \sum_{\alpha, \beta \in \Delta(\gamma), \alpha \neq \beta} s_\alpha t_\beta (\alpha, \beta) \leq 0$$

が成り立つので $\varepsilon = 0$ だとわかる. よって

$$0 = (\gamma, \varepsilon) = \sum_{\alpha \in \Delta(\gamma)} s_\alpha (\gamma, \alpha) = \sum_{\alpha \in \Delta(\gamma)} t_\alpha (\gamma, \alpha)$$

であり, $\forall \alpha \in \Delta(\gamma)$, $s_\alpha = t_\alpha = 0$ が言えた.

step4: $\Delta(\gamma)$ は Φ の底

$\Phi = \Phi^+(\gamma) \amalg (-\Phi^+(\gamma))$ なので, **step1** と併せて **(B-2)** が, **step3** と併せて **(B-1)** が従う.

step5: 任意の底 Δ に対してある正則な $\gamma \in \mathbb{E}$ が存在して $\Delta = \Delta(\gamma)$ となる

Φ の底 Δ が与えられたとき, $\forall \alpha \in \Delta$ に対して $(\gamma, \alpha) > 0$ を充たす $\gamma \in \mathbb{E}$ をとる^{*8}. **(B-2)** より γ は正則であり, かつ $\forall \beta = \sum_{\alpha \in \Delta} \beta_\alpha \alpha \in \Phi^+$ に対して

$$(\gamma, \beta) = \sum_{\alpha \in \Delta} \beta_\alpha (\gamma, \alpha) > 0$$

が成り立つので $\beta \in \Phi^+(\gamma)$, i.e. $\Phi^+ \subset \Phi^+(\gamma)$, $\Phi^- = -\Phi^+ \subset -\Phi^+(\gamma)$ も分かる. ところが **step4** より $\Phi = \Phi^+ \amalg \Phi^- = \Phi^+(\gamma) \amalg (-\Phi^+(\gamma))$ なので, $\Phi^+ = \Phi^+(\gamma)$ でなくてはならない. 従って $\forall \alpha \in \Delta$ は分割不可能であり^{*9}, $\Delta \subset \Delta(\gamma)$ だと分かった. **(B-1)** および **step4** より $|\Delta| = |\Delta(\gamma)| = l$ なので^{*10} $\Delta = \Delta(\gamma)$ が言えた. ■

^{*8} このような γ が存在することを示そう. **(B-1)** より Δ は \mathbb{E} の基底だから, $\forall \alpha$ に対して $\gamma_\alpha \in \mathbb{E}$ を, \mathbb{E} の部分ベクトル空間 $\text{Span}_{\mathbb{K}}(\Delta \setminus \{\alpha\})$ の $(,)$ に関する直交補空間 $(\text{Span}_{\mathbb{K}}(\Delta \setminus \{\alpha\}))^\perp$ への α の射影とする. Δ の元は全て互いに線型独立なので $\gamma_\alpha \neq 0$ である. このとき, $\{k_\alpha\}_{\alpha \in \Delta} \in \prod_{\alpha \in \Delta} \mathbb{R}_{>0}$ に対して $\gamma := \sum_{\alpha \in \Delta} k_\alpha \gamma_\alpha$ とおけば, $\forall \alpha \in \Delta$ に対して $(\gamma, \alpha) = k_\alpha (\gamma_\alpha, \alpha) > 0$ が成り立つ.

^{*9} $\beta_1 = \sum_{\alpha \in \Delta} \beta_{1\alpha} \alpha$, $\beta_2 = \sum_{\alpha \in \Delta} \beta_{2\alpha} \alpha \in \Phi^+ = \Phi^+(\gamma)$ を用いて $\alpha = \beta_1 + \beta_2$ と書けたとする. このとき Δ の元の線型独立性から $\beta_{1\alpha} + \beta_{2\alpha} = 1$ かつ $\forall \gamma \in \Delta \setminus \{\alpha\}$, $\beta_{1\gamma} + \beta_{2\gamma} = 0$ が成り立つが, **(B-2)** より $(\beta_{1\alpha}, \beta_{2\alpha}) = (1, 0)$ または $(0, 1)$ かつ $\forall \gamma \in \Delta \setminus \{\alpha\}$, $\beta_{1\gamma} = \beta_{2\gamma} = 0$, i.e. $(\beta_1, \beta_2) = (\alpha, 0)$ または $(0, \alpha)$ でなくてはならず, $0 \notin \Phi^+$ に矛盾.

^{*10} [?] では集合の濃度 (cardinality) の意味で $\text{Card } \Delta$ と書かれていた.

定義 3.2.3: Weyl の区画

- 位相空間^a \mathbb{E} の部分空間 $\mathbb{E} \setminus \bigcup_{\alpha \in \Phi} P_{\alpha}$ の連結成分の 1 つのことを (開な) **Weyl の区画** (Weyl chamber)^b と呼ぶ.
- **正則**な $\gamma \in \mathbb{E}$ が属する Weyl の区画のことを $\mathfrak{C}(\gamma)$ と書く^c.
- Φ の **底** Δ に対して定理 3.2.1 の意味で $\Delta = \Delta(\gamma)$ ならば $\mathfrak{C}(\Delta) := \mathfrak{C}(\gamma)$ とおき, Δ に関する **Weyl の基本区画** (fundamental Weyl chamber relative to Δ)^d と呼ぶ.

^a Euclid 空間の定義の脚注を参照.

^b この訳語は筆者が勝手につけたものである. [?] では Weyl の部屋と呼ばれていた.

^c L^AT_EX コマンドは $\backslash\mathrm{mathfrak{C}}$

^d これの訳語は全く普及していない気がする. Δ に関する基本 Weyl の部屋だと語感が悪いと思ったのでこのような訳語を充てた.

補題 3.2.2: Weyl の区画の基本性質

正則な任意の $\gamma, \gamma' \in \mathbb{E}$ および任意の Φ の **底** Δ を与える. 定理 3.2.1 によって得られる Φ の **底** $\Delta(\gamma)$ と書く.

$$(1) \quad \mathfrak{C}(\gamma) = \mathfrak{C}(\gamma') \iff \Delta(\gamma) = \Delta(\gamma')$$

(2) 写像

$$\begin{aligned} \{ \text{底全体の集合} \} &\longrightarrow \{ \text{Weyl の区画全体の集合} \}, \\ \Delta &\longmapsto \mathfrak{C}(\Delta) \end{aligned}$$

は全単射である.

$$(3) \quad \mathfrak{C}(\Delta) = \{ \gamma \in \mathbb{E} \mid \forall \alpha \in \Delta, (\gamma, \alpha) > 0 \}$$

証明

(1)

■

補題 3.2.3: Weyl の区画と Weyl 群の関係

正則な任意の $\gamma \in \mathbb{E}$ および任意の Φ の **底** Δ を与える. このとき以下が成り立つ:

- (1) $\forall \sigma \in \mathcal{W}$ に対して $\sigma(\Delta(\gamma)) = \Delta(\sigma(\gamma))$
- (2) $\forall \sigma \in \mathcal{W}$ に対して $\sigma(\Delta)$ もまた Φ の **底** である.
- (3) $\sigma(\mathfrak{C}(\gamma)) = \mathfrak{C}(\sigma(\gamma))$
- (4) $\sigma(\mathfrak{C}(\Delta)) = \mathfrak{C}(\sigma(\Delta))$

証明

(1)

■

3.2.2 単純ルートの性質

3.2.3 Weyl 群の性質

3.2.4 既約なルート系

■ 3.3 ルート系の分類
